

## 頭に浮かべながら眠る

二月二十一日 金曜日 頭に浮かべながら眠る

今日も、トモナさんはお休み、六時間となる。

朝一番のHRの時間、

「きのうは、お前の大活躍でえ、恐喝を捕まえたそうでえ。」  
と、小山先生は、手に服装検査盤を持って、  
笑いながら、半分、ほめているような調子で言う。

しかし、後が悪かった。

机の中の整頓を調べる日で、検査され、  
僕の、いいかげんところが、バレちゃった。

「なんや、お前の机の中、がつがつ、  
いろいろ、押し込んである様子やなあ。

それ全部が、今日の分け？

明日の分まで、入れてあるんと、ちゃうかいなあ。」

僕の机の中に一杯押し込んであるのを見て  
びっくりする先生だった。

「はあ、家で勉強しいひんやつは、全部学校に置いてあるんです。  
一々、通学路を運ぶのは、カバン重たいし、しんどいし。」

「あれ、お前は、兄貴と同じことを言ってる！  
じゃあ、全教科書か。」

「そんなだらしのない事したらあかん。  
せっかく、お前は、ええ男やなあと  
ほめたってんのに、差引きゼロや。」